

三章五節 想による「私」の仮構

(一) 「想」とは

「想」は入力されたデータを判断区別する「作用」であり、また判断区別された「もの」や「こと」のことでもある。「見た」「聞いた」と感知されたものが、「想」において「赤い」「花」「チェロの音」というように意味処理を受けて、具体的内容として知られるようになる。

私たち人間は、何か対象を見た瞬間、それを「花」「薔薇」などというように直ぐに「言葉」でラベルして識別を強固なものとするが、スマナサーラ長老の説明によれば、「想」はそのような言語機能がはたらく以前の極単純な区別作用をも意味している。それは人間のような複雑な言語機能を持たない動物にでもあるようなシンプルな認識作用を含む⁽¹⁾。例えば、車を運転している際に、赤信号を見てブレーキを踏み、カーブを見てハンドルを切る、というようなシンプルな判断動作も、「想」のはたらきによる。普段の日常生活の中では、何らかの情報が入力されるたびに、言語以前の単純な区別や判断は絶えることなく生じている。私たち人間が持っている言語機能は、この「想」のはたらきを著しく増強および拡張するものであると言える。

私たちは感覚器官から得た情報を、過去から積み上げてきた記憶にもとづいて判断区別している。記憶というフィルターを通して、今この瞬間の感覚情報は意味処理を受ける。例えば、色形の視覚情報は、神経ネットワークに蓄積された記憶データと照合されて「赤い」「丸い」「果物」「林檎」「甘酸っぱい」「美味しい」「昨日のお昼に食べた」「親戚の親戚がよく送ってくれる」などといった一連の意味情報や記憶情報が取り出されることになる。その対象の感覚情報には特別な意味が与えられて、世界の他の存在物とは明瞭に区別されることになる。

この記憶のネットワークは柔軟で発展的なものであり、随時、新しい情報の入力によって更新され続けている。たまたま、林檎が腐っていたのを知らずに食べたせいで体調不良となり、林檎が嫌いになってしまえば、「腐っている」「不味い」「迷惑なものを送ってくる親戚」というふうに記憶内容はがらりと変わるようになるかもしれない。

このような記憶機能も、仏教心理学でいうところの「想」に相当する。学習によって知識を習得していくのも「想」の訓練であると言う。赤ちゃんから始まって墓場に入るまで続く学習のステップは、「想」の積み重ねであると言える。

このようなことから、仏教でいうところの「想」とは、認知プロセスにおける意味処理システムの全体を意味しているのだと思う。「想」は入力されたデータを判別区別する「作用」であり、その作用によって区別された「もの」や「こと」でもある。また、

情報処理システムが利用するデータベース（記憶）も「想」である。このデータベースは緻密にネットワーク化されており、関連する項目は必要に応じて適宜、取り出されている。

(二) 想による「私」の仮構

仏教は五蘊の「想」も「私」を仮構する一因子であると指摘する。では、「想」が「私」を仮構するとは、具体的にはどういうことなのだろうか。「想」は複雑な機能を有しているが、「想」によって「私」が仮構されるメカニズムは、次に記すように少なくとも三つのレベルに分けて考えることができるかと思う。

〈第一〉のレベルは、今現在の意味処理プロセスの進行（流れ）による「私」の仮構である。何かを判断したり区別したり、関連するものを想起するといった、休むことなく続く意味処理のプロセスそのものが「私」を仮構している。意味処理のプロセスの流れの中では、「私が判断している」「私が区別している」「私が想起している」などというように、いつも何かを判断区別している「私」が実在するものとしてはっきりと感じられるかと思う。しかしながら、仏教の心理学が指摘するところによると、実際に存在しているのは、判断区別する意味処理のプロセスの流れであり、そのプロセスの創造者や所有者としての「私」ではない。認知プロセスの流れは確かにあるが、その流れと分離独立して存在する者はいない。私たちは情報処理のリアルタイムの流れを「私」と感じ取っているのであり、「私」が情報処理の流れを生み出しているわけではない。

論理的思考を好む現代人の多くは感情を抱いているときよりも思考しているときに、「私」を強く感じているかと思う。だが、思考の際中に、思考の流れを生み出している固定的、実体的「私」は、実際にはそこにはいない。逆に、思考の流れによって、そこに「私」は仮構される。

先に述べたように、意識の場の発現、そして一次現象特性から二次現象特性への展開の中で、認識主体は「識」「色」「受」によって仮構される。この認識主体である「識」「色」「受」の統合的なはたらきの上に、「想」という思考判断のはたらきが新たに付加されることになる。「私」は、「識」「色」「受」「想」の四つの要素の統合的なはたらきの中で仮構される（五蘊のうち、最後の「行」の要素は後で加える）。西洋の多くの哲学者は、思考や理性を魂の「属性」として捉えた。だが思考は本来、魂の属性として存在しているわけではない。魂という実体があって、その属性として判断区別するはたら

きがあるわけではない。心的事実としては、「識」^{しき}「色」「受」のプロセスに、「想」という別のプロセスが付け加わっているだけである。実にシンプルな話であるが、私たちはそのシンプルさを見失っている。

スマナサーラ長老が『「私が」区別しているように思っても、それはただのsaññā（想）だよ、我でも魂でも何でもない⁽²⁾』と指摘するように、区別している実体的「私」は、本当はそこにいない。区別するというはたらきがあるだけである。その絶え間なく続く判断区別の流れが「私」として感じられている。

〈第二〉のレベルは、カテゴリー化や区別作用による「私」の仮構である。「想」は世界の中の一切のものを判断区別してカテゴリー化する。私たちは世界の中のあらゆるものを区別分類しながら生活している。

人間が行なうありとあらゆる区別の中で最も基本的な区別というのは、おそらく、「自己」と「非自己」の区別であろう。私たちは世界を自己と非自己の二つに分断する。「想」のはたらきは、「私」を「私でないもの」から区別して、「私」を周囲の環境から分離独立させる。では、この最も基本的な区別である自己と非自己は、いったい何を基準にして分けられているのだろうか。自己と非自己の境界線は何処で引かれるのであろうか。一見ものすごく簡単そうな問題ではあるが、よくよく考えてみれば、これはなかなか厄介な問題である。

最も原始的で分かりやすい自己の境界は「皮膚」であろう。皮膚の内側にある身体と精神活動（思考、感情、意志など）の総体が自己であり、皮膚の外側にある一切の存在が非自己である。身体内での一切の生理学的、心理学的な現象が自己の範囲であり、身体外の一切の現象が非自己の範囲である。これは幼い子供からお年寄りまで皆が納得できる単純な自己の範囲であろう。正常な自己の感覚はいつも体の内側にある。

そしてさらに区別作用がはたらけば、身体は自己から除外され、「精神活動」のみが自己の範囲として認知されるようになるだろう。非自己となった肉体は、精神である自己（魂）が宿る「器」として感じられるようになる。考え、推論し、怒り、苦しみ、泣き、喜び、楽しみ、望み、期待し、信じ、愛する……このような精神のはたらきのみが自己の範囲となる。

そしてさらなる区別作用がはたらくことになれば、自己は感情や思考とも明瞭に分離区別されるようになるかもしれない。感情や思考は魂の「属性」として、魂「本体」と区別されるようになる。本体としての魂は不可知なものであり、特定の内容として知られることはない。だが、魂本体は、感情や思考、意志といった精神活動の「所有者」もしくは「支配者」としての役割を担うようになる。

このように、自己は区別作用が進むにつれて、皮膚という境界線の内側から、心の中の把捉不可能な特異点（魂本体）へと、次第に収縮していく。ありのままに感じられていた生の感覚としての自己は、透明な特異点としての自己へと収縮することになる。この収縮した自己は特定の内容を持っているわけではないので、捉え難く曖昧で不明瞭なものである。だが、言語によって「私」とラベルされれば、それは一つ概念となって、あたかも一つの実体であるかのように取り扱われることになる。

そして最後に、〈第三〉のレベルの「我」の仮構は、記憶によるものである。個人が保持する記憶の内容によって、「私」が具体的にはどういう存在かが決められる。家族の構成や名前、住んでいるところ、私の職業や地位、友人、趣味、好きな食べ物や嫌いな食べ物、過去から積み上げてきたエピソード（出来事）のすべて（小学生のときに父母が離婚したこと、中学生のときに県の陸上大会で一位になったこと、高校生のときにがむしゃらに勉強したこと、大学生のときに可愛い恋人と三ヶ月のあいだ同棲したこと……）、これら個人の歴史的な記憶の数々が「私」の個性を形作ることになる。記憶は「私」をユニークな存在として仮構する。私は記憶によって歴史的な自己となる。

私自身の意識経験に関して言えば、頭の中でおしゃべりをしているときや、思考がぐるぐると巡っているときには、私は私自身の「私」を強く感じている。思考の流れそのものは頭の中で感じられるのだが、この思考の流れに付随するかのようには、私自身の「私」は頭の中に居座っているかのように感じられる。しかしながら、ヒトが皆、精神機能の中心である自我／自己を頭の中に感じているわけではないようである。序章で述べたように、私の友人の中には、心の中に自我／自己を感じていても、それが頭の中ではなくて身体を中心（つまり、胸や心臓のあたり）に位置していると感じている人々がいた。私がそのように感じる人々に対して「首のあたりで身体が二つに切断されたときはどうなるの？ そのときも自分自身は首から下の胴体にいると思うの？」と質問すると、友人は心臓のあたりを指で示しながら「そのときはこのあたりで『しまった！』と感じる」と述べ、別の友人は「そのとき魂は肉体から遊離してしまう」と答えた。どうやら、皆が「私」を頭の中に位置していると感じているわけではないようである。自己の感覚を（言語機能の中心である）頭の中で強く感じている人々にとっては信じ難い話であるかと思うが、自己を何処で感じるかには個人差があるらしい。

息子が四歳のとき、いっしょにお風呂に入りながら「〇〇くんは、体の中のどこにいるの？ パパは頭の中だよ」と聞いたことがある。息子は「え～、ここだよお！」と言いながら、お腹のあたりを撫でていた。息子が六歳のとき、再度同じ質問をしてみたが、息子は「ここと、ここと、ここだよ！」と言いながら、お腹と胸と顔の三カ所を指差した。そして、私の自我の範囲が小さいことに対して、息子は「パパはちっちゃい！ぼくはおおきい！」と大きい声で繰り返しさげんでいた。七歳の今は、同じ質問をすると、「パパ、なにってんのか、わかんない」と言っている。

推測するに、あまりにも論理的思考を好む現代人は、「思考の流れ」と「私」を同化しているのではないだろうか。思考の流れを「私」と感じているのではないだろうか。つまり、主として「想」によって「私」が仮構されている。その結果、情動や感情の場である身体よりも、思考や分析の場である頭脳が、「私」の居場所となっている。論理的な分析や議論をすればするほど、思考のはたらきそのものが「私」を思考の場である頭の中に局限化、固定化させることになる。

感じること（受）よりも思考すること（想）を好む多くの現代人にとって、「私」は思考のプロセスの中に、思考の場の中に、強く仮構されている。

1 アルボムッレ・スマナサーラ、藤本晃「ブッダの実践心理学 アビダンマ講義シリーズ 第三巻 心所（心の中身）の分析」サンガ(2007) 三五～四六頁

2 アルボムッレ・スマナサーラ、藤本晃「ブッダの実践心理学 アビダンマ講義シリーズ 第三巻 心所（心の中身）の分析」サンガ(2007) 四三～四四頁